透析医のひとりごと

「透析医のひとりごと」 関野　宏

私には“ひとりごと”をいう習慣がない．だいたいひとりごとは他人に聞かせるものではないし，聞かれたとすればあらぬ誤解をされかねない．あの親父ボチボチきてるんじゃないか，のたぐいの疑いであり，そういう場面はできるだけ避けたい．したがって，この小文は「透析医のひとりごと」というテーマにそぐわない内容になるかとも思うが，そこのところは重々御容赦ねがいたい．

考えてみれば，自分がどうして透析医とよばれるような現在になり至ったのか，いまだに釈然としないところがある．なんとなくなりゆきでそうなったような気がしてならない．そもそも腎臓や透析に関わるようになったのも，大学の泌尿器科に入局（1966年，なんとかれこれ40年前）した所為であるが，この動機がいささか不純であった．父親が外科の開業医であったところから，私も当然外科医になるつもりで，インターンの時から外科に入局希望を出していた．が，インターンも終わりの頃，泌尿器科主催の麻雀大会に誘われた．これが運命を決めたとしかいいようがない．名人と謳われた私である．素人を相手に優勝してしまうのは必然であった．それはいい．優勝賞品が超立派な洋ダンスであったのがいけなかった．そんな豪華なものを貰っておいて「ハイ，サヨナラ」は，義理堅い私にはとてもできない．一週間後，秘尿科教授室には，入局の挨拶をしている私がいた．泌尿器科に入る報告をした時の父親の反応は忘れられない．なにが悲しくて下水処理屋になるのかと，冷たく言われた．内科や外科を医の本道とする当時の一般の臨床医の泌尿器科に対する評価はそんなものだったのである．

当時教室には七つの研究班があったが，私は腎臓班にはめこまれた．自分で選択したわけではない．入ったらそうなっていた．勿論その頃は，御存知のように透析の専門医はおろか透析療法そのものが確立されていない時代であった．大学病院にも診療科としての腎臓科は存在せず，人工腎臓装置は泌尿器科にコルフのバッチ型が一台あったが，前年腎移植の補助手段として用意されたもので，慢性腎不全は対象外であり内科のテリトリーと考えられていた．内科では，その場しのぎの腹膜灌流がほそぼそと行われていた．

ところが1968年に大学に人工腎臓室が設置され，泌尿器科管理ということになって事態は一変した．腎臓班の私達は人工腎臓室担当を命令されたのである．腎臓班では尿路腫瘍，尿路結石，腎結核など外科的手

術の対象となるものが比較的多く，もともと外科医志向であった私にはそこそこ面白かったのだが，今度はいよいよ末端浄化槽係かと，この時は少なからず落ち込んだものである．

かくて不本意ながら本格的に透析に取り組まざるをえない仕儀となったが，われわれやその前後の世代の連中は，大方似たような経緯でこの道に入ってきたのではないかと思う．最近では，しかるべき教育機関には腎臓科や血液浄化部が設けられ，若い人達の研修にはことかかない環境が整いつつある．彼らが，確立された透析療法という認識の下に，迷うことなく自分の意志でこの道を選び，優秀な専門医に育っていくことができれば，透析療法の前途は明るいものになると思う．

ここから先は“ひとりごと”である．透析療法はたしかに進歩したが，結局医学周辺の諸科学の進歩に倚っているにすぎないのではないか，という医学からみればかなり自虐的な思いが抜けきれない．透析療法にかぎらず医学全般にいえることだとすれば，医者の存在意義はどこにあるのだろうか．ここのところを特にこれからの若い人達に自覚してほしい．医学は病人を癒すためのものである．最新の知識や進歩した機器に埋れて，それが自分の力と錯覚し傲慢に患者に接することがあるとすれば，それは医療の中での自らの存在意義を否定することにほかならない．病気はなおせても人を救済できないのである．

医療法人　宏人会